

考えられる。しかしその正確な診断は容易ではない。OSNA法(One Step Nucleic Acid Amplification)は平成20年10月より保険取載され、比較的簡便な方法として注目されている。

【対象・目的】平成21年9月から現在までの67例、132個のリンパ節を対象とし、従来の病理診断と比較検討した。

【結果】永久標本との一致率は94%であった。OSNA法にて陰性と診断した5例に転移を認めたがいずれも微小リンパ節転移であった。

【考察】OSNA法は簡便であり有用であると考えられた。

21 肝転移切除後5年間の予防的イマチニブ治療終了後に再発を生じた小腸消化管間質腫瘍(GIST)の1例

神田 達夫・西村 淳*・間島 寧興**
高野 可赴・石川 卓・矢島 和人
小杉 伸一・味岡 洋一***・畠山 勝義

新潟大学大学院 消化器・一般外科学分野
厚生連長岡中央総合病院 外科*

立川メディカルセンター PET

画像診断センター**

新潟大学大学院 分子・診断病理学分野***

症例は82歳、女性。67歳時に回腸GISTの摘出術を受けた。その後、肝再発を生じ、72歳時、74歳時および76歳時の計三回、肝切除術を受けた。その後、2004年7月から2009年8月まで補助療法として60か月間のイマチニブ治療(300mg/日)が行われた。イマチニブ中止後7か月の2010年3月に撮影したCTで、肝切除断端に不整な腫瘍陰影が出現、再発と診断された。転移性GISTへのイマチニブ治療では、長期内服の後であっても中止により再発する危険がある。

22 緩和ケア普及のための地域プロジェクトの進捗状況

鈴木 聡・三科 武・二瓶 幸栄
松原 要一・大滝 雅博*

鶴岡市立荘内病院 外科
同 小児外科*

【はじめに】緩和ケア普及のための地域プロジェクト(PJ)介入研究は今年最終年度を迎えた。介入前の当地区のがん患者・家族の医療に対するアンケート結果が明らかになったので、PJの進捗状況とあわせて報告する。

【方法・結果】調査対象は、患者は外来通院で再発・転移がある85名、遺族は1年間病棟や在宅で死亡した患者家族184名。結果、50%の患者・家族が「身体的苦痛の緩和」、「精神的ケア」に改善が必要と答えた。一方、介入後の主要評価項目では、介入1年で在宅死率が6.5%(前年比+0.8%)、緩和ケア利用率が22%(同+20%)に上昇。

【まとめ】緩和ケアのスキルアップの重要性とがん医療に対する満足度が得られるための患者・家族への対応のポイントが明らかになった。また、アウトカム、プロセス評価から現時点での介入研究の有用性が示唆された。